1. はじめに:

・犬の消化管内寄生虫感染率に関しては、これまで様々な調査結果が報告されているが、調査年・地域などの条件によって変動が認められる。

・今後の動物愛護業務の参考とするために、岡山県内における消化管内寄生虫の感染率を調査し、たので報告する。

２. 検査対象及び方法:

- 平成17年4月から平成18年6月までに、岡山県動物愛護センターで保護・引取りされた犬のうち、無作為に選んだ個体からの131検体（保護犬67、引取り犬64;オス62、メス69;子犬106、成犬25;正常便64、軟便67）を対象とした。
- 検査方法は、回収した糞便を直接鏡検、飽和食塩水を用いた集卵浮遊法の２法で実施した。
- 検査項目は、犬回虫、犬鞭虫、犬鉤虫、コクシジウムの4項目を行った。

３. 結　果:

- 直接鏡検では、回虫が26.7%検出され、浮遊法では、回虫32.8%、鉤虫5.3%、鞭虫0.8%が検出された。
- 保護犬では、回虫47.8%、鉤虫6.0%、鞭虫1.5%、コクシジウム9.0%が検出され、引取り犬では、回虫17.2%、鉤虫4.7%、コクシジウム9.4%が検出された。
- オスでは、回虫41.9%、鞭虫1.6%が検出され、メスでは、回虫24.6%が検出された。
- 子犬では、回虫38.7%、鉤虫3.8%、コクシジウム11.3%が検出され、成犬では、回虫8.0%、鉤虫12.0%、鞭虫4.0%が検出された。
- 正常便では、回虫32.8%、鉤虫10.9%が検出され、軟便では、回虫32.8%、鉤虫1.5%、コクシジウム17.9%が検出された。

４．考察及びまとめ：

・正常便でも軟便と同等の感染率を示したことより、便性状が寄生虫感染の指標とはなり得ないことが示された。

・したがって、センター飼育の譲渡犬に対して、今後も便性状にとらわれない定期的検査を継続的に実施し、健康な状態で新たな飼育者へ譲り渡す必要がある。

・子犬の犬回虫感染率は、成書等に言われる感染率と比較して低かったが、引取りされた子犬での感染率が低いことから、飼育母犬の駆虫により垂直感染が減少していることが一因と推測される。

・ただし、引取り犬での回虫・鉤虫・コクシジウム感染も同時に示されており、ヒトへの感染を予防するために、犬との接触後の手洗いの励行、飼育犬の確実な駆虫、糞便の適切な処理を今後もふれあい教室、各種講習会を通じて、一層呼びかけていく必要があると考える。